

生涯学習でのボランティア活動と校区の役割

—都城の事例を中心として—

神 田 嘉 延

はじめに

教育基本法では生涯学習の理念を明確にしている。学校教育ばかりではなく、国民がいつでもどこでも学べるように地域や職場などでの社会教育の役割が大切である。教育基本法での生涯学習の理念は「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」(第3条)としている。

国連憲章に基づく国際的な教育機関であるユネスコは、人間らしく生きていくうえですべての人々が学習する権利をもつことの重要性を学習権宣言として強調している。「学習権とは、読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり、自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利であり、あらゆる教育の手だてを得る権利であり、個人的・集団的力量を発展させる権利である」。

「学習権は、人間の生存にとって不可欠な手段である。もし、世界の人々が、食糧の生産やその他の基本的な人間の欲求が満たされることを望むならば、世界の人々は学習権をもたなければならない。もし、女性も男性も、より健康な生活を営もうとするなら、彼らは学習権をもたなければならない。もし、わたしたちが戦争を避けようとするなら、平和に生きることを学び、お互いに理解し合うことを学ばねばならない。学習こそキーワードである。学習権なくしては、人間発達はいえぬ」。

「学習権なくしては、農業や工業の躍進も地域の健康の増進もなく、そして、さらに学習条件の改善もないであろう。この権利なしには、都市や農村で働く人たちの生活水準の向上はないであらう」。

う。端的に言えば、このように学習権を理解することは、今日の人類にとって決定的に重要な諸問題を解決するために、わたしたちがなしうる最善の貢献の一つである」。(ユネスコ・学習権宣言)

学習権や生涯学習の理念のもとにボランティアによる学習の活動がいかなる役割をもっているのか。ボランティアによる学習が、いかに生きがいにつながっていくのか。ボランティアによる学習が、多くの人々に学習の機会を与え、それが、いかに人間的に成長し、人間的な幸福をつくりだしていくのか。

学校教育法では児童の体験活動を重視して、ボランティア活動や自然体験活動の充実を推奨し、社会教育関係団体と学校の連携に十分な配慮を義務づけているのである。(学校教育法31条参照)

ボランティアのコーディネーター的役割をしているボランティア指導者研修を定期的に進めているNPO法人きらりネット都城の役割は、地域で生涯学習を自発的に推進していくうえで、極めてユニークなNPO法人である。NPO法人きらりネット都城の設立趣旨は次のとおり素晴らしい内容である。「設立趣旨 「市民一人ひとりが、生きがいを持って心豊かにきらりと光る人生をおくる為には、生涯を通して学ぶ心を持つことが大切です。私たちは生涯学習を通して知識や技術などの能力を高めることや、生きがいを創設しその中で社会を見つめ、自分らしい生き方を再発見できます。さらに学習者が学習の成果を地域の中で発表したり活動することで「生涯学習によるまちづくり」に寄与するという側面もあります。」

一方、市民の中にはいろいろなジャンルで一芸・一技に秀で、しかもボランティア精神を持って他人に指導をしても良いという人もいます。私たちはこうした指導者と学習者の情報をネットワークし生涯にわたって「いつでも・どこでも・

だれでも・なんでも」学べる仕組みを作ることを目的とし、特定非営利法人「きらりネット都城」を設立するものです」。

特定非営利法人「きらりネット都城」の歩みは、平成17年(2005年)6月に設立されたものである。都城の社会教育は、生涯学習振興協議会を平成5年度(1993年)に結成し、地域でのグループ学習の組織化にとりくんできた。生涯学習ボランティア指導者認定を市の教育委員会が認定し、生涯学習を推進していく講師を広く市民に広報している。そして、地区公民館などの身近な生活の地域で市民の学習を推進していくとする施策である。

都城は、中学校の校区単位に地区公民館を整備して、地域での学習活動を住民の自発性を生かして展開している。この学習活動のネットワークを組織しているのがNPO法人きらりネット都城である。

きらりネット都城は、よか・余暇、楽習ネットワーク事業として、気軽に地域住民が学習組織をつくっていくことを積極的に援助している。この事業は、学びたい人(学習者)と教えたい人(生涯学習ボランティア指導者)を結ぶ、地域住民の学習料で運営している。よか・余暇・楽習ネットワーク事業を利用すると、地区公民館、教育集会所、コミュニティセンターの使用料が無料になり、学習の成果の発表の作品展示、生涯学習フェスティバルなどで発表が可能になる。仲間が5人以上集まればいつでも学習がはじめられるように住民の学習援助をしているNPO法人である。

ここで、人間的成長に大きな役割を果たすボランティアはなにかということを確認していくことが必要である。ボランティアとは、もともとヨーロッパのキリスト教の世界では、志願兵という意味で、自発性が原則である。仏教の世界でも無財の七施のひとつとして、心施ということで、損得をぬきに自分の身体を使って、世のため人のために尽くすことを教えている。そこでは、利他心で、慈悲をもった思いやりが大切である。無財の七施では、やさしいまなざしで接すること(目施・げんせ)、穏やかで温かい表情で接すること(和顔施・わがんせ)、愛のあることばで接すること(愛語施・あいごせ)真心を込めて行うこと(心施・

しんせ)、座席を譲ること(床座施・しょうざせ)、他人を自宅に迎え入れて、雨露しのぐ場を提供すること(房舎施・ぼうしゃせ)と無財の布施を仏教では求めている。

東京ボランティア市民活動センターは、ボランティア活動における4つの原則をたてている。

ボランティアというのは強制されたものでなくて、自主性、主体性という原則が大事である。上から言われてやる仕事ではないということである。それからボランティアというのは社会性、連帯性がある。これはボランティアを通して多くの人と協力し合う。三つ目が無償性、無給性である。じつはこの無償性、無給性というのは、給料ではないという意味なのである。ここには有償ボランティアということもある。第4は、創造性、開拓性がある、先駆性を持っているということ。このようにボランティアでは四つの原則をあげている。

またボランティアを支援していく原則とは何かということで、大阪府は、三つあげている。行政がボランティアを支援するときは自発性の尊重である。第2には、活動が公益的であるかどうか。第3は、対等なパートナーシップができているかどうか。

ボランティアは、自由な活動であって禁欲的活動ではない。ボランティアは、自発的行動をする活動である。それは、行政を超える活動ができるのである。行政は、全体的に拘束されるが、ボランティアは、自分自身の素直な心で出発し、願いや夢を共有する様々な仲間と出会えることで、共感という連絡器の威力をもっており、温かさ、創造性、多彩さの活動であると大阪ボランティア協会の早瀬昇は「ボランティアの理論と実際」の著書のなかで主張する。(1)

ボランティアによって、人は大きく成長することの大切さをP.F.ドラカーは、非営利組織の経営のなかで次のように述べる。「組織に働く者の場合、自らの成長は組織のミッションと関わりがある。それは、この教会、この学校での仕事に意義ありとする信念や献身と深い関わりがある。仕事のできないことを、設備、資金、人手、時間のせいにしてはならない。それではすべてを世の中の

せいにしてしまう。よい仕事ができないのをそれらのせいにすれば、あとは墮落への急坂である。非営利組織のリーダーにとっては、人の成長を考えることは必須のことである。人は組織とビジョンを共有するからこそ非営利組織で働く。何も得ることのないボランティアが長く働いてくれることなどありえない。金銭的な報酬を得ていないからこそ、仕事そのものから多くを得なければならぬ」。(2)

このボランティアをきちっと育てていく組織として、NPOという組織がある。これはNonprofit Organizationで、利益を目的としない社会組織である。このNPOというものが日本のあちこちできている。これは、日本の地域づくりや学習のあり方にも新しい考えが生まれていることになるのである。

1. 都城の地域をみつめることと生涯学習の役割

都城は、日本人の故郷である。霧島の麓であるということで、ニニギノミコトが天から舞い降りてきたという伝説の地である。ここにはたくさんの日本人の故郷の文化が詰まっている。

霧島の山は浄土の山とよく言われる。日本の民衆の仏教が始まっていくうえで、ここからスタートしていったのではないかと思うほどに、古い仏教文化の遺跡がある。性空伝説ということで、いまお寺として残っているのは姫路の書写山、圓教寺というところしか史跡は残っていないけれども、都城には、性空とのかかわりの話がたくさん残っている。

いま環境問題で、循環社会をどうつくろうかということで、社会的に大きな話題になっている。この地には田の神さあという、極めて循環社会を象徴しているような、山から神が下りてくるといふ伝統行事がある。田の神さあ、そして恵みを与えた山にもどっていく田の神というように。山と田んぼが一体に結びついている文化がある。田の神信仰や昔からあった山神、水神などのアニミズム信仰がたくさんある。それらは、太陽の恵みということを非常に大切にしている。

こういう信仰は、ベトナムの地にもあり、東南

アジアの農村にも広くみることができる。ベトナムでは、共同体が強い、村の結束が強い。日本と同じようにベトナムもそういう古い共同体が、非常に強いところである。したがって今後、未来を考えていくうえで、いま人類が悩んでいる問題を解決していくうえで、ここにはたくさんの宝がある。

世界の人が驚いた東日本大震災。大変な震災だと思うけれど、でも暴動一つ起きない。あんな大事故があって、人々が冷静に対処している。この姿を見たときに、日本という国のすばらしさを世界の人たちがみた。日本人に対して、がんばろう、がんばってほしいという気持ちを投げかけてくれたのも、日本人の絆の心というものが多分世界に伝わったのではないか。この心とは何か。まさに農村にあるアニミズム文化、太陽信仰に起源をもったの共同体を基盤にした絆である。都城にはそういうものがたくさん詰まっている。この絆の文化が現代に大震災のなかで生き返っているのである。

そんな意味でここから、都城から、人々が悩んでいる、人類が悩んでいるものを、ベトナムの人、カンボジアの人、またはアメリカの人、またはイギリスの人、いまちょっと落ち着き始めているけれどイラクとかリビアだとか、そういういろんな世界の人々にも、平和と自然循環をこの地は発信できるものがあるのではないか。

でもここに住んでいる人は多分、普通に暮らしている。でもその普通に暮らしていることに、ものすごい宝の文化があるということである。そのことをまず、最初に確認していくことが、心を豊かにしていくうえで大切なことではないか。

2. 国際化と生涯学習

じつは私は鹿児島大学で教鞭をとっておりまして、私の研究室に留学生が十五カ国から来ました。ですから私の教え子は世界の十五カ国にいる。これは大変幸せなことだと思う。イギリスに行けばいろいろ案内してくれる。ニュージーランドに行けば案内してくれる。ブラジルに行けば案内してくれる。世界のあちこちに卒業生がいるということを変えたいと思っている。

これから多分この都城も国際化がどんどん進んでいく。そのときにぜひ都城のすばらしさを誇りに思っ、そして世界の人たちと交流ができれば、世界の人たちもこの都城に住んでみたいという方が出てくるかもしれない。多分これから日本という国は、いままでと違って、いろんな民族の人たちがともに暮らすような、そういう時代に入っていく。従来、大和民族の人たちが中心に暮らしていた、この日本の大地に、各国の人たちが憧れて住みたいと考える。そういう人たちがもっと増えてくるような気がする。現に東京に行くと、いろんな国の方々が生活している。そして日本人からいろんなことを学び、国に帰って新しい仕事をつくらうというような動きが生まれている。これから日本という国はもっと大きく、東アジアというレベルで国際交流がどんどん進んでいくのではない。

でもそういう中でよく、国際化していくと英語がしゃべれないといけないというふうに思う方もいると思う。日本はおかげさまで経済が強いことがあって、日本語でも通じるような状況もみる。ベトナムに行っても日本語をしゃべると若い青年たちが寄ってくる。「僕はいま日本語を学んでるんだ。下手な日本語なので、日本語がうまくなりたいために、友達になりたい」。かつてわれわれが学生時代に英語を学ぶときに、アメリカ人が来たときに、東京でそういうことをした。いまはアジアの人たちが、日本語を学びたい。そういうことで日本人と仲良くなりたい。同時に、東日本大震災で見られたように、日本人の絆を持っているすばらしさをこれから学びたいという若者たちが、アジアにはたくさんいる。

3. 住民の生きがいと生涯学習での地区公民館

きょうは生涯学習ボランティアの指導者研修ということで、お聞きしたところ、都城は、公民館という組織を中学校単位で組織して、地区公民館をつくっている。そこを中心にしてボランティアの方が指導者になって、社会教育を、生涯学習を盛り立てていこうということである。

この生涯学習の講座をずっと眺めたところ、多

くは趣味やお稽古事が中心になっていたような気がする。これはある面で、ここの地域の人たちが趣味やお稽古事を自分の楽しみとして、自己実現という点で、楽しく暮らそう、余暇を楽しみたいという、そういう余裕が生まれ始めているのではないか。この趣味やお稽古事を自己実現的にやっていこうというのは、一つの大きな生きがいだろう。

定年退職してどんな生き方をしようかということで、私も東京生まれで、いまだに小学校のクラス会、中学校のクラス会というのをやっている。先日小学校のクラス会で、八十四歳の先生を囲んで芝浦歩きをした。その時でも話題になるのはみんな、趣味である。どんな趣味をやっているか。どんなお稽古事をやっているかと。当然クラス会に来れるような人ですから、小学校の当時の先生も、「君たちは恵まれているんだよ。このように来れるんだから」と。「神田くんなんか鹿児島から来れるんだから、一番幸せな男だなあ」と言われた。先生から言われて、「ああ、ぼくはいま幸せな暮らしをしているんだなあ」と、また感謝の気持ちが出てきたわけである。

やはり年取ってくると自己実現したい。何か自分の趣味やお稽古事をしたいという、これは生きがいとして非常に大切なことだ。定年になって何もすることがないというと、これでは人生真っ暗になってしまう。だからいまここにお集まりの方はまさにそれを指導者としてやっているわけですから、毎日楽しくてしょうがないという人たちがいないんですかね。これは非常にいいことだ。いつまでも健康でいたいというのは、これが肉体的な健康だけでなくて心の健康に、ものすごく大事なような気がする。

私も趣味は何だといわれたときに、いまマラソンをやっている。まあジョギングもしている。これも一つの楽しみである。それから山登り。霧島の山、ちょっと登れなくなっちゃったんで、最近休んでいる。それから歴史めぐり。これも大好きである。とくに都城にはいろんなものがある。江戸の末期どうだったのかとか、ここは昔どうだったのかということで、昔の「三国名勝図絵」といって、江戸の末期のときに、薩摩藩の名勝地を書い

たものがある。都城の図書館にも入っている。当時の都城というのはどんなお寺があって、どんな景色だったのかというのが、それを見るとよく分かる。非常に変わってしまっているというのがよく分かる。それを歩いて確認している。

だれでもそのように自分の趣味やお稽古事で生きがいを感じている。そして自己実現をしている。これは非常にいいことだ。でも私があえて社会貢献のための生きがいと学習というので、問題提起をしたのは、もう一つ、自分自身の趣味から、まわりの人にいろんなことをしてあげて、ボランティアをして、感謝される喜びがあるということである。これも一段とレベルの高いところに到達していくものではないか。

都城の市民憲章ですが、人を思いやる心を持ち、ともに歩んでいける社会をつくりましょうという。このような文章があるけれども、まさに人を思いやることによって自分自身に生きがいを感じていく。こういうことはたくさん人生にある。

NPO組織での生涯学習を推進する都城のきりネットも設立趣旨のところを見ますと、生きがいと学習の関係を強調している。生きがいを持って心豊かにきりと光る人生。こういう生きがいを創生するというのを大きな課題にして、このNPOができたという設立の趣旨が書かれている。まさにこのボランティア精神ということを持ちながら地域に貢献する、社会に貢献していく。これがもう一つレベルが上がり、喜びがもっと大きくなることじゃないかと。

4. 地域づくりと地区公民館の役割－お年寄りと子どもの関係を中心として－

NPOである都城きりネットがいろいろやっている自己実現の学習は、これからの地域作りに大きな役割が期待されている。自分自身が楽しむというのを友達と一緒に楽しむということで、ある面で地域づくりの出発になる。でもそれぞれやっていることはお花であったり手芸であったり、美術工芸であったり、趣味の次元かもしれないけれども、でも一人で楽しんでるのではなくて、まわりの人たちと楽しみが始まっているわけである。これは、地域づくりの出発点になっていくの

ではないか。

このきりネットが実施しているような学びというものが、趣味やお稽古事の組織化というものと、街づくり協議会というものと、各中学校でつくられた地区公民館とどう融合していくかということは、大変興味のあることである。

じつはこの絆というものは日本人が持っているすばらしい心である。やはり絆というのはまさに地域がなければつぐれないわけで、この地域というのをどこにおくか。それを恒常的にどこにおくか。これも大変大きな議論があるところである。

昔からの集落を基本に考えたらどうかというような考え方や、小学校の校区を中心に考えたらどうかとか。いやもっと大きく、昔の旧村単位で考えたらどうかとか。いろんな考え方がある。都城は地区公民館でやっていこうと決めたわけである。まずこの地区公民館を大切にしてみる。ここにいろんな知恵を結集していく。都城の地域づくりと生涯学習は、これから出発せざるを得ない。

それでこの地区公民館というのを掘り下げて考えてみると、ここでは中学校の校区を単位にしている。中学校の校区を地域づくりの基礎単位に考えたわけである。じつはこれは都市の中心部と市街地からちょっと離れたところと多少考え方が違ってくる。市街地から離れた地域では、小学校の校区を大切にしている。中学校の校区になると歩いていける行動範囲ではなくなる。市街地の中学校の校区は、歩いていける行動範囲である。

学校教育を大切にしようということは、子どもを対象に考えるわけである。子どもは未来の主人公であり、未来をつくっていく。お年寄りの人は、今までの人生を語る、そして自分の趣味をやる。そのことが、子どもがそこにいることによって、お年寄りの人たちが、自分のやってきたことを未来につなげていくことにもなる。なんでもない趣味、昔の竹細工や竹馬を子どもに教えた。なんでもないことだけれど、子どもたちがお年寄りから学ぶことで目の輝きが違う。学校の先生とは全く違う目の輝きを持つわけである。またお父さん、お母さんとも違う。そこに地域のお年寄りの教育力というものすごいものがある。

とかくお年寄りの人は、自分が生きてきたことから見ると今の子ども、自分の娘や息子、いろいろ不満をもつことは当然だ。とかく愚痴を言いたがる。お年寄りが愚痴を言える場があるということは、これは非常に大切なことである。昔からお互いに愚痴を言い合う場というのがあったわけである。お年寄りの集まるところでは、嫁さんの愚痴であつたり、息子の愚痴であつた。でもその掟は、そこでしゃべったことは外に出さない。これが原理原則なのである。ですから大いにそこで愚痴を言い、大体みんな同じなんだなあということを確認しながら、ストレスを発散させる。このことはお年寄りだけが集まるということに意味がある。

しかし、お年寄りが地域に積極的に関わって、自己の役割を果たせるのは、子どもとの関係ではなくさんある。それは、お年寄りの集団が、閉鎖的ではなく、より開放的に未来にむかって自己の役割を発揮していくことである。

閉鎖したお年寄りだけの活動では、未来につながらない。ですから孫たちの世代とともに、いろいろ自分のやってきたことを話す。学校に行つて時々教師たちの代わりに話す。そういう学校もいまあちこちに出てきている。教室の中でお年寄りがしゃべることがあたりまえになっていく地域の学校も増えている。

小学校六年になると歴史の授業がある。都城の安久という小学校では「ごんたの会」というのがあって、そこで小学校の六年生に地域の歴史を教えている。お年寄りの人たちが子どもたちに昔のことをしゃべる。場合によっては一緒に遊ぶ。こういうことも大きな活動である。この都城の地区公民館というものが、学校との関係を持ちながら活性化していく。これは、すばらしいことである。

そして子どもの生きる力をつけていく。学力といますけれども、東大出ても生きる力がなかったら意味がない。変な話であるが、有名大学を出たんだけど、ニートになってしまう事例がたくさんある。お父さん、お母さんが、「こんなはずじゃなかった」と。まあ、勉強、勉強とやってきて、生きる力がもてないとニートになってしまう。や

はり学力をつけるということは、同時に生きる力をつけていくことであると。

学力は、生きる力と結びつかないと意味がないということである。小学校、中学校から塾だ、塾だと勉強しかししないとどうなるのか。算数が何点、数学が何点、英語が何点ということしか気にしない。少年、青年が、そのような状況では、子どもはいびつに育ってしまうことになる。

まさに生きる力をつけるということの目標をきちんともって、学力を考えていくことが大切なのである。この生きる力をつけていくうえでも、地域の誇りが大切である。都城から東京に行つて、自分は都城出身で恥ずかしいと思ったら悲しいことである。そんなふうに思ったら若者のエネルギーが出てこない。

京セラを創設し、今JAL再建の会長をやっている稲盛さんなんかは堂々と、「自分は鹿児島だ。故郷に支えられて、だからすごいことができたんだ」つていつている。彼は自慢にふるさがある。鹿児島生まれ、鹿児島育ちが自分の人間形成の原点であると。そのように、自分が成功したときに、自分の出身地が言えない都城ではいけない。そんな教育ではいけない。ですから小学校、中学校のときから地域に誇りを持てる教育が大切ではないか。地域の教材をもっと工夫して生きる学力を考える必要がある。

同時にここには昔からすばらしい絆の心があるわけである。現代的に言えば道徳になるが、人としての心、これをきちっとつけてあげる。いまなんでもお金、お金の時代ですから、詐欺をしたり嘘を言ったりしても、心を痛めないということでは悲しいことである。

お金が手に入ればいいんだと拝金主義では本当の地域の誇りの文化の継承はできない。そういう風潮が強くなると地域の文化の崩壊に拍車をかけていく。そうじゃなくてもっと人として生きるということと地域の誇りの文化を結合した教育を行っていくことは、非常に大事である。そのような教育実践をしていくうえで、地区公民館というのが、もっと充実して、地域の人々が学校に積極的に関わって、地域ぐるみで子育てをしていくことが大切ではないか。

祭りもそういう中で、地域ごとに活発にできたらと。ここにはいろんなお祭りがあるけれども、できたら都城一本の大きなまとまりが必要ではないかと。大阪の岸和田市なんか行くと、だんじり祭りとして、市全体のものになっている。各町内会から神輿が出てくるような、そんな祭りを、もっと都城全体としてできないかと。

未来に向けてみんなが元気になるような、そんなものが何かできたら大変活気がでくる。そのためにもせっかくつくった地区公民館を、地域づくりの中でどんなふうに充実させていくかということをもみんなで考えていくことが都城にとって大切ではないか。

5. 中学校の校区での地域づくりと生涯学習

都城は生涯学習による街づくりというのを前からずっとやっている。それは「地域づくりはまさに人づくりである」という考えから中学校の校区で、都城市の区域に、十一地区をつくる。そこに財源を委譲し専任職員を配置して、住民からなる街づくり協議会というものをつくっていかうということで、まちづくり協議会の推進を打ち立てている。

都城市では協働のまちづくりの推進ということで、中学校単位で住民が主体的になって、地域づくりをやっていけるような組織づくりの援助をしている。この組織づくりや住民自身による地域計画、地域活動の推進において、学習の役割は極めて重要である。都城市では、協働のまちづくりの推進施策について次のようにのべている。

「都城市では、協働のまちづくりの推進を基本姿勢に掲げており、地域住民が主体的かつ自発的に参加し、行政と役割分担をしながらまちづくりを推進するために、新たな住民自治組織の構築が望まれています。そのために、中学校区11地区(旧都城市内)において、権限、財源等を移譲し、専任職員を配置することにより、地域内分権を推進する「まちづくり協議会」(仮称)の設立に向けて取り組んでおります。

まちづくり協議会設立においては、全地区一斉設置とはせず、手あげ方式としております。

また、希望した地区については、「まちづくり協議会」設立のための準備会議である「まちづくり(市民自治)検討会議」を立ち上げ、その後それぞれの地区の状況に応じた「まちづくり協議会」の設立を図るという二段階方式を取っています」。

各地区の設立支援としては、担当課(コミュニティ課)の職員と地区公民館職員、地域サポーター(地域に在住する職員)が事務局体制をとっており、会議等の運営を側面支援している。平成18年度より、手をあげた地区から順次、11地区中8地区において「まちづくり(市民自治)検討会議」を立ち上げて検討を進めている。平成21年度中には、6地区において「まちづくり協議会」設立がされた。残りの地区の2地区が平成22年度中の設立。

先行して手をあげた地域においては、「まちづくり協議会」のあり方をめぐって模索が続き、行政主導ではない地域主導の組織づくりを実現するために、検討に大変時間を要した。そして、これらの検討の成果として、地域における住民自治認識の高まりが起り、既存の団体や組織の枠にとどまらない、地域の事業所なども巻き込んだ新しい住民自治の組織の構築がなされたと行政は認識している。

「まちづくり協議会」設立後も、市の行政は、目標である「地域内分権」実現に向けて、十分な協議が続けられることを期待しているのである。まちづくり協議会設立後の財源については、「新交付金制度」の導入を検討している。予算配分や使途裁量などの権限は住民自らが責任をもって自主的、主体的にまちづくりに取り組んでいけるようにしている。それは、財源を移譲するための財政支援として、市が自治公民館や各種協議会、団体に交付していた補助金等を一本化し、それに運営費を加算した額を「我がまち交付金」として交付するしくみである。各地区のまちづくり協議会は、各団体の既存の事業を見直し、再編整理しながら、事業計画を策定し、独自の事業を実施することも可能としている。そして、市に代わって自治公民館や各種協議会、団体に予算配分をする権限を持つことになり、事業の実施・進行管理・評価をしていくことにより、「地域内分権」が図ら

れることになる。この地域内分権の考え方をいかに実現するかということは、今後の大きな課題である。これには、地域住民の学習が伴って、住民自身が自発的に地域興しを創造していくことである。

現実、まだ始まったばかりでなかなか地域主権という理念の実現までは距離がある。引っ張っていく専門の職員は、市役所のコミュニティー課になる。市役所のコミュニティー課の職員と地区公民館が、リーダーシップを発揮して、そしてコーディネートとして働いている。まだこれが全市にくまなくできていない。出来ているところも地域の住民をくまなく組織しているわけでもない。これからこの街づくり協議会は、運動の中心に学びというものをすえて、多くの住民を自発的な意志をもって結集していくように企画していく必要がある。

都城の十七、八万人の行政を全部一括集中してやるか、地区公民館方式でやるかで全然違う。福祉とか教育の充実、中学校や小学校の校区単位でできるのではない。地区公民館方式で、お金も含めて大胆に委譲している自治体は日本にはいくつかある。東京の三鷹市とか、関西では宝塚とか。全部、地区公民館の中学校とか小学校校区単位に、福祉と教育をお願いしている。そのためには住民が力をつけなければならない。法律のことも知らなきゃいけない、福祉の専門家もたくさんなくてはいけない、いろんな面で人材が要求されていく。とにかく考え方として、もっと地区公民館という単位、地域の暮らしの単位に、行政の仕事も下ろしていくという考え方である。

それからいろんな活動をするときに、何でも補助金頼みというのが今まで強かった。これから自分たちでできることは自分たちでやるということで、ボランティアの意味も大きな役割になっていく。実はNPOをどう活発化させていくか。これは非常に大きな課題である。利益を目的としないんだけれども事業をしないとお金が入ってこない。その関係をどう見るかということ。つまり利益を目的としないから事業もしないというのは、自立した組織はつukれない。財政的に自立した社会活動がなかなかできないので、行政からお

金を貰う。市民から寄付金を貰う。それだけで終わってしまう。

それではこのNPO活動は発展しない。どうやって事業活動をやって、非営利であるけれどもきちっと活動の財政を築くかというのが、大きな課題である。

これはさらにネットも同じ苦悩を抱えているのではない。都城にあるいろんなNPOも、どうやって事業を展開していくか。つまり経済活動に参加しないと収入を得ることはできない。その経済活動が利益を目的としない経済活動と、会社のように利益を目的とする経済活動と、どこがどういうふうに違うのか。それらをきちんと考えて事業活動をNPOが積極的に展開していくことは大切なことである。

趣味やお稽古事、これをボランティアとしてやる。それを継続的にやるには一定程度、事業活動をししないと継続しない。この事業活動が自分のお金儲けのためにやる事業活動ではなくて、社会に貢献するために経済活動をするということなのである。

NPOという何とも経済活動をしなくていいのではない、事業活動をしなくていいのではない、ボランティアというのは無給性が原則だから、そういう事業活動はすべきじゃないとかという議論がある。決してそうではなくて、持続的に組織を維持するためにはある程度、自分たちで収入を上げていく。そしてその活動を見て、多くの人から寄付金を貰うということだ。

もう一つ、この財政、これは国の次元である。ですけれども、NPOに寄付したお金をもっと税制の中にも抜本的に改革していく必要がある。東日本大震災の救済でも、税金ですお金と寄付金のお金と二つある。圧倒的に多いのは税金である。でも考え方としては税金だけではない、もう一つの寄付という行為によって困っている人を助けていくという。それを国に税金というふうに納めないで、NPOに収めたことが税金と同じように社会的に評価されていくということ。そういう仕組みづくりをもっと日本は国でしなければならない。

そして将来の都城における地域の発展の可能性

は、やはり地区公民館という組織がせっかくできて、これでやろうと言ったわけですから、これに依拠してこの都城のすばらしい文化で地域づくりをしていく。昔からあった田の神さあ文化だとか隠れ念仏の文化だとか、六社権現の文化だとか、さまざまなすばらしい、世界に誇れる文化が都城にあるわけですから。都城の地域文化というのは、地域循環の社会をつくりだしていく、循環システムをつくっていくすばらしい文化である。

これから地域自給、地域でやれることは地域でやる。つまりエネルギー一つ取ってみても、全部ばかでかい原子力発電所を造って、そこから電気をもってくるということじゃなくて、自分たちが暮らしている所で電気をつくっていくということが求められる時代になっている。自然エネルギーの積極的な試みを工夫していくのも都城のあたらしい地域づくりの考え方になる。

都城にはものすごい可能性がある。ここは畜産地域である。この畜産をいかに利用していくか。ベトナムでも現に利用している。家庭の台所は豚の糞のメタンからひいている。簡単にできることである。でも臭くてしょうがないとか火力が少ないという問題もある。多分都城でやったら怒られる。近代技術をうまく利用して、メタン発酵させて、うまくエネルギーに利用するとか都城では、いろんなことができるのではないかな。

食料も一緒だ。多分TPPの問題がある。いろんな議論があるが、国際化というのが多分時代の趨勢としてあるが、それに対抗する論理は何かを考える必要がある。

まさに地域の自給の中で新しい循環的な経済をどうつくっていくか、そして、地域の循環的なしくみで、国際化していくことはどういうことができるのか。高度の科学技術の成果による自然循環に貢献する部品や技術、人材など海外に提供できるものはたくさんできていく。そういう意味で未来系の地域循環システム、こういう未来への展望を持ちながら地区公民館を充実させていく方向性が大切である。

都城の自然条件や歴史文化は、高度な科学技術の成果を生かしながら、未来を積極的に先取りしていく地域づくりが有利な状況である。このため

には、都城の地域を見直して、新たな発想で、とくに地域の暮らしを大切にしたい循環型の地域づくりが求められているのではないかな。地域からの学習運動にうつり、人づくりは地域づくりということから出発することが必要である。人材養成がなければ地域の未来はないのである。

あとがき

本稿は、2011年10月11日の都城市の「生涯学習ボランティア指導者研修会」の講演に手を入れたものである。生涯学習を推進していくうえで、地域の人びとの生きがいつくりが大切であり、そのために、趣味の活動も地域づくりのなかで位置づけていく必要性を強調した。さらに、地域の暮らしを豊かにしていくために、積極的に学習していく意味を問題提起した。この学習は、ユネスコの学習宣言の理念のように、人間の生存にとって不可欠という視点からである。ボランティアは、自発的で自由な活動であり、自らが成長していく場でもあるということを問題提起した。都城市の生涯学習の推進にNPO組織のきりりネットが大きな役割を果たしていることは注目すべきことである。さらに、この学習の基盤に、中学校の校区に公民館をおいている。この意味についても地域に根ざした生涯学習ということから積極的に評価した。

注

- (1) 早瀬昇他「ボランティアの理論と実際」中央法規出版(1)(1) 2頁～13頁参照。
早瀬昇他「テキスト市民活動論」大阪ボランティア協会、8頁～17頁参照。
- (2) P.F.ドラッカー「非営利組織の経営」ダイヤモンド社、206頁～207頁

